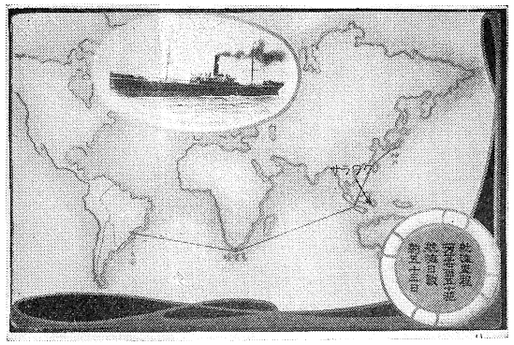
サラワックの思い出

宇津木　亥一

サラワック王国とは、おとぎばなしの夢の王国の名ではありません。十九世紀から二十世紀にわたって英領北ボルオの西南部を占有し、一九六三年住民の強硬な抵抗を押切ってマレイシヤ聯邦に加盟し、隣邦インドネシヤ、フィリッピン等から徹底的な反撃を受けました。過般ジャカルタでの池田・スカルノ会談では、池田首相がその調停に立つ用意があるとか無いとか喋って、豪州、ニュージランドで執拗な質問を受けたところから、少しその名が世に浮び上った地方の一小国です。



神戸を出帆して台湾南洋を通りブラジルへの旅
南満州汽船帝国丸（5136トン）

鈴木からは早くも明治四十年前後から、故依岡元祖を始め幾多の諸先輩が乗り込み、事実上イギリスの委任統治下にある国王と接衝して「日沙商会」を設立し、貿易のかたわら営々とゴム園などを開拓し、数千ヘクタールのエステートを九百九十九年に及ぶ長期の租借権益とを併せ獲得して居りました。

ただ今では日沙商会創業期の功労者諸氏はすでに亡く、長老の方々も老齢のため余り辰巳会には出席されません。また或る一部の会員を除いては「ニッサ・クーチン」の電略宛名で鈴木本社との間に絶えず交信のあったことでさえ記憶にも無いでしょう。なにぶん日本郵船欧州メールの幹線から遥かに外れたサラワック国クーチンなどに特別の視察の要件でも無い限り訪れた会員は数少ないと思います。

私どもは大東亜戦時、日沙の社員として、身命を堵してこの地に渡り及ばずながらも軍と協力し、資源開発に努力したのでした。数百の社員を現地に送り、余多の社員をして南溟の海底に、或は瘴癘の奥地に、あだかもおが屑の如く命を捨てさせ、しかも遂には敗戦の汚名を背に着せられて引揚げてまいりました。

それから十七ケ年経過します。もうよい加減にすべてを忘却の彼方に追いやり、諦め切った方がよいと理性は命じますが、明治の昔から此の地に踏み入り、幾多の苦難とたたかって『日沙』を築き上げ経営して来た多数の諸先輩を追憶し、また自身が身を以ってその中に投じた戦時中の様相を想起するとき、如何にもその長期間に蓄積された努力が文字通り空しく水泡に帰し去ったことが心の底から惜しまれてなりません。

いま故西川玉之助社長のお顔がありありと影を重ねて私の脳裡に浮び上ります。『きみィ、たいへんなとこや、およそ文化というものから隔絶されたとこや、何んにも無い処や』と私が出発する前に云われた音声が耳の底に残って居ります。昭和廿一年夏引揚げて須磨のお邸に挨拶に行った時には、もう老齢のベッドに横たわって居られましたが『よう帰って来て呉れた。こんなものでもパンというそうや、一きれだが食べて行って下さい』と云われた。食糧欠乏どん底の時です。涙が出ました。

いたずらに感傷的なことを書くのではありません。標題のサラワックという所はどんなところであったのか、私の戦中の見聞を今日から想起して、ご存じの方は昔を懐しまれ、未知の方には、そんな処だったのかと知って置いて頂きたいからです。

私は昭和十八年から約三ケ年、日沙の社員として現地で暮しました。まづサラワックの首都クーチン市、それからブルネー・アピ市（ジェセルトン）サドン（石炭々坑）テゴラ・ガデン（水銀鉱山）と当時の主要な場所で、軍との連絡のため、または所管の重要物資確保のため勤めました。たいへんな奥地までも或いは淋しい海辺の街へも可能な方法で旅行し滞在もしました。単独のときも同僚数名と同行の時もあります。

地図をご覧下さい。現在でも鉄道というものが図上に見えますか。有ることは有るのですが、全域に亘っては殆んど無いも同然です。港湾の目星しいものが見えますか。一つも有りません。少くとも五千屯級の汽船を横付ける岸壁は発見されません。海岸は遠浅です。河川は満潮時数十キロ上流まで逆流します。しかも干満の差が極めて大きい。その北ボルネオに重要物資の石油や石炭が出るというので、陸海軍共同作戦のもとに一夜にして敵前上陸敢行、占領を完了したのでした。郵船鹿島丸、香取丸を先頭に六七隻が船団を組み、日沙の大関雄只長老始め数名の方々が東道の役を引受けての敢行です。香取丸は敵の魚雷に一瞬にして吹き飛び、同船に乗って居た社員は影も形も無く海の藻屑と消え去りました。

私の着任したクーチン市には、当時わが軍司令部が頑張り大いに張りに威張って居りました。南洋で瀬戸物商や雑貨商を営み、少しマレー語を云える邦人輩が軍司令部の役人に納まり、私ども民間商社員を眼下に見降して大言壮語して居りました。馬鹿馬鹿しくて話にもなりません。然し全部がそうではありませんので、司令官以下幹部の重要人には優秀な、よく話の判る人も多数実在しました。

当時の軍と接触し、これを操縦し思う通りに誘導するということは可成り技術的なものであったと思います。軍司令部はその後、アピ市へ移動しました。私はその移転に伴い連絡の役目でアピにかなり長期駐在しました。アピ（ジェセルトン）は如何にも風光明媚で海岸も清く、人情も平静でしたが、極めて暑いのと、降雨が無く溜めた天水を使用せねばならないので困りました。その頃時々わが船団が敵機の襲撃にあって燃えて居るのを遠い海上に望見しました。

アピからクーチンに帰任して間も無くテゴラ・ガデンの水銀鉱山に引籠る役目に廻されました。テゴラはクーチン市から小舟一日がかりで川を遡り、また其処から一日間徒歩で奥山に分け入る処の水銀採取地でした。

水銀が毎月何屯か採取され、それを兵器に使用のため内地に送り得るというので、日沙の事業は軍に非常に大切にされたのです。私は日々この閑静な山奥の鉱山で清冽な水と、涼しい澄み切った空気とを愛し、絵にも描けぬ秀麗な風光を友として、生活しました。敗戦へ指向する環境は万事が尽く愉快なものとは云えませんでしたけれど、未だ日本が手を上げてしまわない限りは、現地住民とも仲好く手を携え得たので、不意に寝首を掻かれる如き不祥事には到りませんでした。首都クーチン市の飛行場は毎日毎夜敵機の爆弾を見舞われて居りました。

それから廿年八月の降伏です。軍の武装解除から始まり、一定地への集結、わが社の物資返上、被略奪等々の末、結局は鉄条網の囲む集結地への収容、移動、私有貴重品の奪取を次々にやられ、煙草も無くなり浴水も欠乏し、食糧の不自由を遺憾なく嘗めさせられたうえで、極めて小型の千、二千屯級汽船二隻で内地への送還でした。

それで明治から初まった日沙の苦心開発も権益も尽く水泡と消えたのでした。あらゆるものは没収せられ、背に負うリュックには数枚の肌着と一二枚の毛布ばかりが残って居りました。げに歎かわしい事です。惜しみても余りあることです。諸先輩の御労苦を思えば血涙ものです。

限り無い回想を書き綴って行けば遂に終りが有りません。幾百名の同僚、先輩の生命を現地に喪失し、自分等ばかり生き残って帰り得たのです。

今日ときどき催される辰巳会に出席して、やあ、やあと昨日あった友に今日あうが如く親しみ話し合える事は私の無上の光栄と歓喜であります。どうぞ皆さん御自愛ください。

（財団法人関西厚生協会）

日沙社長西川玉之助氏がサラワックより柳田氏への絵ハガキ（大正六年）